

第1回動物福祉市民講座(戸上先生)

【戸上先生からのご回答】

- 講義、ありがとうございました。国によっては短頭種の犬やスコティッシュフォールドの繁殖場がなくなっているということで間違いないのでしょうか。そうした場合、それまでその種のブリーディングをしていた業者から反対の声は上がらなかったのでしょうか。よろしくお願いします。

〔戸上先生〕

ご質問ありがとうございます。

日本では商業ブリーダーが主流と認識しておりますが、ヨーロッパでは主なブリーダーの種類はホビーブリーダーです。ホビーブリーダーは、各ブリーダーが小さな規模で動物の繁殖をし、各自で飼い主に直接販売をする体制となっています。もちろん各ブリーダーさんが所属している協会からは反発もあります。短頭種に関しては、マズルの長さが頭の3分の一以上という条件を満たしていれば繁殖が可能なため、レトロバグ（従来のマズルが長いバグ）のような形に戻していくことでブリーダーとの落としどころになっています。スコティッシュフォールドに関しては、遺伝子を持っている猫は繁殖（場所によっては飼育も）禁止のため目にする機会は少なくなっています。

- 乗馬をしていることもあって馬への福祉について興味があります。現状日本では引退馬を救うという名目でのクラウドファンディング等も増えており、それが本当に馬の為なのか人間のエゴもしくは最後まで金銭を得るための摂取の一環なのか、いろいろ考えさせられます。日本の競走馬が産業動物というカテゴリーであるのに対しドイツではどのようにカテゴライズされているのでしょうか。日本産業動物特有の課題点等ご存知でしたら教えていただきたいです。

〔戸上先生〕

ご質問ありがとうございます。ドイツでは競走馬は個人の馬としてカテゴライズされているという認識です。馬にとっては健康に被害がない限り引退後も生きていく権利がありますが、救おうとしてお金を集めることで、引退馬の原因になっている競走馬の飼育団体が根本的な問題を改善する機会を逃してしまう、という負のスパイラルになっていると思います。理想としては、クラウドファンディングをしなくとも今まで馬から利益を得ていた

団体が引退した馬も責任を持って世話をする。それができないのならば、そもそも競走馬として飼育する資格は無いのでは、と個人的には思います。そのような制度を国や地方自治体が決めていくことが一番の理想ですが、そのような体勢を作っていくまでの時間や労力、知識が必要となり現場ではクラウドファンディングが一番早く動ける結果なのかと思っています。

- ニワトリの屠畜の際、麻酔下で殺処分を行うということだったが、食品となるものに麻酔すなわち麻酔剤投与は実際あり得るのか。電気ショック等による気絶ではないのか。であるとすれば、麻酔という表現は適切ではないのではと考える。
またドイツではイヌ・ネコの店頭販売がなくなったと言われていたが、現実にはまだ店頭販売しているショップは少数かもしれないが存在するのではないか。たとえば自家繁殖施設を持つような場合などは、店頭での販売はかのようなのではないか。

〔戸上先生〕

ご質問ありがとうございます。屠畜の場合は麻酔下で屠畜を行うのであって殺処分は行いません。また、麻酔というのが屠畜においては動物を気絶させる行為で、混乱を避けるためにスタニングという表現が適切かと思います。そのスタニング方法としてはニワトリの屠畜の場合には首を切って放血する前に行う「電気ショック、または二酸化炭素で気絶をさせる」ことがあげられます。

麻酔薬投与というと、薬のイメージが強いと思いますが、ニワトリの気絶の際に使用される二酸化炭素も麻酔薬に数えられます。しかし、麻酔薬とイメージされているものがペントバルビタールなどの場合には、食品となるものへの屠畜過程での投与はありません。

また、ご存知の通りヨーロッパでは自家繁殖と言われているホビーブリーダーの犬・猫の販売は主流ですので生体の直接の販売はあります。しかしそれはブリーダーと飼い主の各個人間でのやりとりであって、商業ブリーダーとしての扱いではないため店の定義には当てはまるとは考えにくく店頭販売とは言いません。少し複雑な表現でややこしいと思いますがいかがでしょうか。

- 身近で猫の譲渡会が盛んに行われています。隠れる場所はなく、人の入場制限もなく猫はただ怯えています。その会場では、賑やかに物販があったり、音楽会をやったり。しかも譲渡会の開催時間は5時間です。移動も含めると更に長時間ストレス状態にさらされることになります。
私は動物愛護センターに勤めており、うちのシェルターの猫を譲渡会に出すよう言われることも多いです。私はそのような譲渡会には協力したくはないというのが本音です。お祭りのように人を呼び、頻繁に長時間でも積極的に譲渡会に出して飼い主を見つける。その為には仕方がないと考えているようです。

そこでお聴きしたいのですが欧米での猫の譲渡会はどのようにされていますか？
譲渡会の考え方についても教えてください。

〔戸上先生〕

ご質問ありがとうございます。ヨーロッパでは譲渡会などは日本ほど発展しておらず、猫や犬を飼いたいと思う人がティアハイム（動物保護団体の施設）に自ら向かうというのが主流です。これは、大規模・小規模の都市関係なく車で行かなければたどり着けない施設が多く、これが譲渡を難しくさせる原因になっていると私は個人的に思います。です
で、日本では譲渡会などで人が集まるところに動物を連れて行かないと譲渡が進まないということが認知され活動されている、そしてその譲渡会に参加されている愛護センター様は素晴らしいと思います。

仰る通り現在の譲渡会は人間優先の開催になっていると思いますので、それこそご質問者様のような動物の専門家の皆様が、動物を展示するスペースは静かにする、また動物が隠れられる場所を作ってあげる（それが動物本来の姿なので、それを見てもらわないと家に帰ってから展示の時と違うなどのクレームが来るので）というアイデアを提案するのはいいかがでしょうか。

せっかく動物のために行っている譲渡会が、動物のストレスになっている（動物福祉を低下させている）という認識が無い方が多いのも事実です。現在の譲渡会のあり方を疑問に思っている方は居ると思いますので、動物に考慮した譲渡会を行っているということを売りにして動物ファーストな譲渡会の先駆者になってみるのも動物福祉に関心がある人には魅力的に見えると思います。

- 日本の社会ではまだ、科学的根拠に基づく「動物福祉・アニマルウェルフェア」の概念は浸透途上であり、人の側に立った主観的な「愛護」という発想が主流となっています。講師の先生方もおっしゃっているように、両者はどちらが上か下か、あるいは善か悪といった問題ではありませんが、あまりにもバランスが悪いとも感じています。子どもや若者の教育の現場においても、「動物愛護教育」と銘打った教育活動が行われることはあっても、「動物福祉教育」の領域は未開拓のままです。ドイツやアメリカでは、子どもや若者に対して、動物福祉をどのように教えているのか、当然、州や地域によって差異はあるでしょうが、おわかりになる範囲で教えていただけますでしょうか。

〔戸上先生〕

ご質問ありがとうございます。ドイツの例ですが、私が救急医療で仕事をしていた際に小学生の子供が飼っていたラットに腫瘍がありQOLが低下したため安楽死することになった際、子供を同席させたいという親と反対の獣医師で議論がありました。子供が小学生の

場合には後にトラウマにもなる可能性があるため親のみが同席して、子供には安楽死後に面会して伝えるだけで良いという現場の獣医師の意見と、動物を飼う事の責任として子供には見せておきたいという親の意見の違いだったのですが、どの年齢の子供に何を伝えるか、トラウマなどにならずに理解できるのかという所は重要になってくると思います。この安楽死の例は特殊ですし、もちろん各扱うテーマにもよりますが、早すぎる動物福祉の教育も子供への負担になること、動物福祉とは何なのかをまず一般の大人が認識することから始めないといけません。

動物福祉は、犬を学校に連れて行って話をする専門の方も居ます。しかし、その犬の動物福祉（長距離の移動で各学校をまわる、子供とのやりとりがストレスになる）が低下するのでは、なども議論されています。各学校に動物福祉、という授業があるわけではない状況で、自分が口にするものはどこから来ているのか、その動物たちがどのような生活をしているのかは、日々買い物に行くスーパーの精肉コーナーでは飼育ランクなどでも見れるようになっており、教育の現場からでなくても生活するうえで動物福祉に触れる機会が多くあるように見受けられます。